

死者の記憶——思想史と歴史学の架橋

林 淳

「死生」という言葉が広がったのは、一九七〇年代以降、医療、ケア、ホスピス運動の現場であった。病院で死んでゆく患者にたいして、医療は十分なケアを行ってこなかったという反省がはじまり、近代医療の限界を自覚する声がかたまのように響いた。近代医療は、患者の身体の機能を回復させ日常に戻すことにとめてきたが、死んでゆく人の心にどう対応するのかを考えることは少なかった。死にゆく人たちへのケアについて適切な対処が求められ、緩和ケアなどがなされるようになった。キューブラー・ロス『死の瞬間』は、死にゆく末期がんの患者へのインタビューを通じて、かれらから死を受容するプロセスを学ぼうとしたものであり、死生に対する関心を世界的に広げる効果をもった。医療の現場においては、脳死・臓器移植が話題となって、死生を通じて「死とは何か」が社会的に問われることになった。日本でも脳死・臓器移植、生命倫理は社会問題として長く議論されるようになり、タミナル・ケア、グリーフ・ケアなどの自己の死を見つめる動きがでてくるなかで、死生学という領域が誕生した（島蘭進「死生学の誕生と死生観の探求」『死生学年報 2013』二〇一三年）。多様な死生観への関心が、医療、教育、歴史、心理、倫理、宗教の諸領域にわたって広がり、交流と交渉が今も続いている。

死生学とは別のところで、死が持続的に問題化されてきた領域もある。戦死者の慰霊・追悼・顕彰の研究がそれであり、歴史学、民俗学、社会学、宗教学などにおいて、研究成果が蓄積されてきた。もともと、靖国神社と国家との関係をどのように批判的にとらえるのかという問題意識があった。村上重良『慰霊と招魂——靖国の思想』（一九七四年）は、同『国家神道』（一九七〇年）とともに慰霊研究のさきがけとなった。靖国神社の国家護持をめぐる問題があり、村上は戦前の国家神道が復活しつつあるという危機感のなかで研究をはじめた。『国家神道』の「まえがき」で村上は、「日本軍国主義の復活に対応する靖国神社の国営化が、すでに現実の問題になってきた。……広範な国民が、国家神道に主体的関心をもち、その本質を認識することなしには、国家神道の復活を阻止し、日本の民主主義を前進させることは不可能である」とつよく訴えた。靖国神社、忠魂碑をめぐる違憲訴訟のなかで研究者は、原告側に立つにしろ被告側に立つにしろ、慰霊・顕彰施設の成立と展開、国家とのかかわりを研究するようになった。

しかしその後は司法、政治の場からいったん離れ、より実証的な研究が、歴史学、民俗学、社会学、宗教学などの分野でなされ、堅実な成果を積み重ねてきた。国家主義か民主主義かという、村上のように二者選択を求めることはなくなり、国家とも家族とも異なった、地域という次元における研究が増えたことが一つの特徴であった。かつては天皇制、国家神道と同様に靖国神社の存在は、日本特殊な現象であるという前提で研究がなされてきた。しかし近年では、世界のどの地域でもおこる近代戦争における戦死者の問題であるという理解へ変わって、比較研究へと確実に進んだ（村上興匡・西村明編『慰霊の系譜』二〇一三年）。「記憶」という言葉が語られるようになったのも、比較研究の潮流のなかであった。羽賀祥二『史蹟論』（一九九八年）は、遺跡や遺物への関心を通して、地域社会において歴史意識がどのように編成されていくのかを論じている。羽賀によれば、歴史的功労者の事蹟を顕彰し、彼らの功労の積み重ねによって歴史がつくられ、その事蹟のなかで道徳的規範が発信されてきた。記念碑は、共同体の記憶が共有化され、過去を回顧して失われたものへの感情を喚起するシンボルとして機能する。その後の羽賀の関心は、史蹟の記念碑だけではなく、戦争記念碑へと広がった。

東日本大震災は、災害による大量の死の現実をもたらし、災害がもつ恐怖と危機的状況を痛感することにな

った。阪神淡路大震災とともに、近代史を画する大惨事となり、災害、防災安全、地方行政、遺族へのケアなど、さまざまな難問にわれわれは直面せざるをえなくなった。研究者がみずからの専門性を手放さずに、震災後の状況に対し何ができるのであるのかという自問は、多くの研究者の心におこったのではないか。わだかまりをかかえ、無力感を告白する前に、みずからの専門性をたずさえて、媒介的に震災後の社会にかかわる方途も、人文学研究者にはあるはずである。

佐藤弘夫「崇り・治罰・天災——日本列島における災禍と宗教」（『宗教研究』八六―二、二〇二二年）は、そうした意味で震災後の人文学がありうる方向をしめした稀有な論文である。震災によって生じた亀裂の間から姿を現した「異貌の時代としての近代」を相対化していく方向性が、この論文では示唆されているからである。佐藤の言葉を引用してみよう。

古代以来の長期間にわたる生者と死者のつき合い方を眺めたとき、近代が生と死のあいだに厳密で越えられない一線を引くことによって、生者の世界から死者を完全に排除しようとする時代であることが理解できるであろう。死は日常から遠ざけられ、だれもが死ぬという当たり前の事実すら公然と口にすることができない。

長い日本の歴史のなかで変遷はありながらも、生者と死者とは共棲してきたが、その絆が近代に断ち切られたのである。われわれは、死者を一方的な追憶の対象にはせずに、死者とのかかわりを取り戻す方法を見つける必要がある。

死や死者は、日常的には個人的な次元でとらえがちだが、戦争死、災害死をふりかえると、いかに人間が社会的な存在であったかを痛感させられる。死者は、個人や家族の問題でありつづけながらも、国家、地域社会の次元とも緊密に結びついている。「死者を語る」ことも、社会的な実践になる所以である。死者に関して専門的に特化した学問領域があるわけではないし、死者の専門家が登場することが望ましいことではなからう。大会シンポジウムのテーマ「死者の記憶——思想史と歴史学の架橋」は、これまで人文学のなかで見えにくかった死者に居場所を与えて、異なる分野の研究者間の議論を誘発する目的で企画されている。人文学のどの分

野の研究者も、みずからの専門性をたずさえて死者を語ることをはじめてもよい時期に来ているのではなからうか。それは同時に、細分化している人文文学の諸分野を架橋し、むすびつけ、他者理解を本願とする人文文学がもつ対話の可能性を開く試みにもなろう。日本思想史学は、そうした諸学の結節点をつくる場になりうるように思われる。

（愛知学院大学教授）